あきる野市　第１８期　生涯学習コーディネーター養成講座
第８回（最終回）　令和４年１０月１４日（金）　　担当　有馬廣實

「学習成果の発表とまとめ」　に際して

以下は、実際に市民を対象にして学習や活動の事業を企画し、実施する際に考慮すべき事項を整理したものです。実践講座の最終成果として発表する際には、ここに記述されたことを「ある程度（関連する範囲、必要な範囲で）」考慮して企画案を立案し、発表していただくことを期待します。そして実際に市民を対象に事業を企画する際には、この「**学習成果の発表とまとめ」　に際して**　を十分に考慮していただきたいと願うものです。

１．企画

（１）要求課題（主として個人の趣味・教養の観点に基づく）と必要課題（特に現代的課題・公共的課題、社会的要請）の観点からの企画立案・必要性の考察。
　社会的重要性の高い内容の講座であっても、参加者が集まらない恐れのある場合もある。そのような講座であっても、開催することには「種を撒く」事業としての意義がある。その場合には、企画者を含め、グループ、団体の全員で、その企画の意義や実施可能性について話し合い、認識を深める必要がある。
（２）今日の、かつあきる野市の、（さらに広範囲の）必要課題は何か、を考える。
（３）真に意義のある、楽しい、面白い、かつ心を揺さぶる（感動する）企画を。
（４）仲間と智恵を出し合う。集団で考えて実践する。
（５）地域資源（人材、テーマ、教材　その他あらゆる資源）の最大限の活用。
　地域資源と外部資源のバランスが重要。
（６）以下の事項に留意
①企画の目的・主旨の明確化　②企画の中の活動（アクティビティ、ワークショップなど）の目標の明確化　③評価方法の検討
④プロセスの記録（Ｐ（プラン）－Ｄ（実施）－Ｓ（評価）の基本的な資料となる）

２．募集・集客

（１）企画者およびその所属団体・組織、場合によっては講師自身が、行政や民間の情報掲示コーナーへのチラシ・パンフレットの配置や、情報メディア（広報、新聞、ミニコミなど）に記事掲載の依頼を行う。担当者との日頃の交流が大切。
（２）クチコミ、チラシ・パンフレットの直接手渡し、郵送、ホームページも重要。
（３）チラシ・パンフレットは、内容が「一目瞭然」であることが重要。
　冒頭に近い部分に本質的表現を３つほど明記し、強い印象を持ってもらう。
（４）リピーターの確保（長年の継続と、信頼関係）

３．運営

（１）教室運営、教材の工夫、講師の選定、内部での、および外部の講師や協力者との密接なコミュニケーションに配慮。

（２）成功と失敗の秘訣を先行者（先輩）に尋ねる。

（３）無理のない運営（持続可能な組織と運営のために）

（４）講師、同僚、協力者・支援団体、受講者への敬意を忘れずに。

（５）パワーポイント等の映像資料を利用する場合には、適切に活用することが重要で、これらを多用し過ぎると、理解が浅く留まる恐れがある。

（６）講師の役割・配慮

①教材研究　②機材の調達　③講義方法の工夫（注）　④人間関係の大事さ（講師同士、事務局、受講者）

注:特に高齢者対象の講座や高齢者が多い講座では､会場の配置（できれば建物の１階）、照明（明るく）、資料の明瞭さ（大きな文字等。パワーポイントの場合も同様）、講師の話し方（大きな声で、ゆっくりと、明瞭に）等に配慮すること。

（７）良好な人間関係とコミュニケーションの確保が重要。タテの関係ではなく、ヨコの関係。これらは社会教育の本質の一つである。（注：７、特にその（１）（２）を参照）

①挨拶　②思いやり　③関係者同士のコミュニケーションへの配慮　等

４．講座・講習・イベントの開始時に

（１）受講者、参加者に安心感を与える。

①内容が理解できる、自分でも十分についていけるという感覚。

②「やや難しいかも知れないが、易し過ぎれば学ぶ意味がない。学習は多少の困難を乗り越えること」それが「意欲」及び「希望」ともなる。

（２）学習や活動、イベントの「本質」を、単刀直入に、手短にまとめた表現で伝える。

（３）学習や活動が、将来の発展を含んだものであることを実感させる。

５．事業の対象者の年代（成人対象と高齢者対象、児童・青少年対象）

（１）成人対象

参加者個々人の価値観を否定するようなことはしない。どのような価値観を持っていても、学習・活動に参加でき、意見を述べて、共通の成果を目指すことができる、ということを理解してもらうことが大切。

（２）高齢者対象

①過去および現在の社会的事実（生活環境、出来事等）と個人的経験（職業経験、学習経験、余暇活動等）を適切に活用する。

②高齢者の知識・経験・知恵・技能に敬意を払い、かつそれらを活用する。

③新しいことを学びたいという学習意欲を尊重すること。
④高齢期特有の心身の状況に配慮すること。
（３）児童・青少年対象
①楽しさが重要であるが、本質的なところでは手を抜かない。
②子どもには机上の学習だけではなく、活動を伴う学習が必要であることを忘れずに。
③子どもは将来の大人。十分な敬意を持って。
④子どもには最善のものを与える。三つ子の魂百までも。後世畏るべし。
参考：「教育とは希望を語ること。」（フランスの詩人ルイ・アラゴン）

６．評価

（１）内部（自己）評価・・・一連のプロセスの振り返り
学習要素－①学習内容　②教材　③機器　④指導（学習）方法等
人材要素―①講師　②スタッフの働き（準備、当日、事後処理）等
運営要素－①実施回数　②実施時間帯　③学習環境　④広報等
（２）外部（他者）評価・・・受講者、協力者・支援団体への聞き取りやアンケート
（３）評価結果を内部者（同僚）、講師、協力者・支援団体等と共有する。
（４）マネジメント意識を持って。
①Ｐ（プラン）－Ｄ（実施）－Ｓ（評価）のマネジメント・サイクル。
経験を重ねて、
Ｐ（プラン）－Ｄ（実施）－Ｃ（チェック）－Ａ（評価・修正・実施）
に移行。
②講座・講習・イベントの「目的・目標」に対して「評価」を行う。その意味で「目的・目標」が最も重要。
③どのような学習成果が上がったのか。それは社会的活用が容易なものか。
④企画者同士、及び企画者と参加者（受講者）の共通の付加価値を高める。
（理念の共有、成果の共通評価）
参考：NGO 活動、NPO 活動にとっては、「理念、使命感」が何より重要。参加者に、事業の理念を理解してもらうような構成に努めることが重要。
（５）リピーター（しばしば参加してくれる受講者）獲得が重要。

７．社会教育における学習関係の本質

（１）社会教育は人々（市民・住民）の相互学習
（２）指導者と学習者とが本質的に対等であること。指導者と学習者との関係が多様であるから社会教育は楽しく、有意義となる。
（３）学習者の主体性と自己主導的学習（self　directed　learning）が重要。

（４）学習は自己実現と社会貢献（学習成果の社会的活用）の両者を目指して行われる。
（５）学習は開かれたものであること（仲間との学習、他のグループや団体との協力・相互学習、行政との協働等）が望ましい。
（６）社会教育においては、学習者は、最終的には学習機会提供者（市民・住民が学習する場を設ける）や、生涯学習、地域生活の向上の支援者、推進者となることが期待される。

８．学びの循環

企画者側も参加者側も楽しく学習し、活動することが大事で、その成果が自信や、次の学習や活動の意欲となる。その姿を若い世代や子どもたちが見て、自らのロールモデルとしていく。このようにして学びの循環が行われる。

（以上）